

5. AYA世代のがんを考える

(1) AYA世代のがん

AYA世代とは、Adolescent and Young Adult（思春期・若年成人）の頭文字をとったもので、A世代（Adolescent、15～19歳）とYA世代（Young Adult、20～39歳）を指しています。この年代は、中学生から社会人、子育て世代とライフステージが大きく変化する年代であり、患者さん一人ひとりのニーズに合わせた支援が必要です。

20歳代までにかかるがんは稀なものが多く、原則としてがん診療連携拠点病院を受診することがすすめられます。さらに、15～19歳は小児期のがんと同じ種類であることが多く、心身ともに発達の過程にあるため、小児科で診療を受けることがすすめられています。

(2) AYA世代のがんを考える

AYA世代ではがんの治療前に担当医から、妊娠するために必要な能力（妊孕性）^{にんようせい}を温存するための「妊孕性温存療法」についての説明があります。担当医と何度も面談をすることや、琉球大学病院「がんと生殖医療カウンセリング外来」で相談することが大切です。

また、家族やパートナーとの関わりは生活の中で切り離せません。学業や仕事の継続、就職活動など、対応がすぐに求められる問題もあります。悩んだときには、話しやすい医療者やがん相談支援センターのがん専門相談員に相談してみましよう。がん相談支援センターはすべての相談に対応していますので、積極的に利用することが重要です。

がん相談支援センター → 巻頭 1
妊孕の可能性を残す（妊孕性温存療法） → P19



国立がん研究センターがん情報サービス
AYA世代の方へ

※県外ですが以下の活動団体があります。

若年性がん患者団体 STAND UP!! ～がん患者には夢がある～



体験談

周りが必ずついている

私は5歳と15歳の時に白血病を患いました。

5歳の時の闘病の記憶はボンヤリとしか覚えていませんが、15歳で再発と告げられたときは、5歳当時のつらかった治療の記憶が蘇り、これから始まる抗がん剤治療への恐怖と不安が私を襲いました。抗がん剤治療に対しては口の中が荒れたり、食べたいものが食べられなかったり、吐き気に襲われたりと、過去の経験から本当に不安でしかなかったのを覚えています。

しかし、担当医の先生のひと言が私を救ってくれました。先生は病室に入ってくると「僕が治すから寝ているだけでいいよ。安心して」と声をかけてくれたのです。その言葉のおかげで私は安心感に包まれ、抗がん剤治療と闘病に対する勇気が湧いて、救われた気持ちになりました。

当時は高校受験の進路選択をしている最中だったので、このまま希望校に行くことができないのではないかととても心配でした。また、スポーツを高校でも続けたいと思っていた私は、入院前みたいに思い切りスポーツができるのかな？という心配もありました。しかし、母や院内学級の先生、看護師さんが親身になって進路のことも協力してくれて、治療に専念することができました。時には、看護師さんが勤務後に受験対策を一緒にやってくれたりして、本当に周りに恵まれているなと思いました。

思春期ということもあり、他の人に悩みを話したくないと思うときもありましたが、つらくなったら看護師さんや担当医の先生に話してみると、とても楽になりました。お世話になった周囲の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

現在は、幼い頃から憧れていた職業に就き、日々奮闘しています。

(20代 男性)

入院中の教育支援、復学支援 → P44
子ども向けの制度を知る → P86